
私市私が死んだ

みなきゆきなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私市私が死んだ

【Zコード】

Z0509Z

【作者名】

みなきゆきなみ

【あらすじ】

私市私が死んだ。私市私はつい数日前に中学三年生になつたばかりで、女の子で、ついでに言うと僕のクラスメイトだつた。彼女は冗談ではなく頭のネジが一本飛んでいた。それも、僕らを構成するネジの中で最も大切なものの一本である『社会に暮らす人間であるという意識』というネジがぶつ飛んでいたのである。（サイトと同時掲載）

きさいちわたし
私市私が死んだ。

私はつい数日前に中学三年生になつたばかりで、女の子で、ついでに言うと僕のクラスメイトだた。中学生とは思えない程あどけない顔つきと、自分で工作用はさみで切つてあるらしい黒いセミロングの髪を持ち、いつも年少の幼稚園児のように笑つてゐる彼女は、『冗談ではなく頭のネジが一本飛んでいた。それも、僕らを構成するネジの中で最も大切なものの一本である』社会に暮らす人間であるという意識』というネジがぶつ飛んでいたのである。物凄く端的に言つと、私は自由気ままだつた。

彼女は他人や社会にどう思われようとも、彼女の価値観に従順な態度を常にとつてゐた。学校の制服はノー。抑圧された感じがするから。試験もノー。多数いる生徒を一つの物差しでしか測ろうとしないから。楽しいもの、美味しいもの、解放されたものは全てイエス。ビー玉はイエス。シュークリームはイエス。学校の屋上は特にイエス。晴れの日に私は授業に出ていなければ、彼女は十中八九そこで日向ぼっこをしながら鼻歌を歌つてゐる。それが日常茶飯事なのだから、彼女が教師陣に問題児扱いされていたのは言つまでもない。

僕を含む私は私のクラスメイトは、彼女を可哀想な子だと哀れんだ。いつまで経つても社会性というものを身に付けず、幼い子供のような態度をとり続けてゐる彼女は、今はこれでも大丈夫だろうが将来きっと社会に馴染めず孤立するだろう。苟も学校という社会生活を強いられ、その中で生き抜く方法を経験的に知つてゐる彼らは、私は私のあまりの特殊性が彼女自身を滅ぼすであろうことを感覚的に悟つてゐたのである。

その私は死んだ。

交通事故で即死だつたと言つ。

私は私が死ぬ數十分前、僕は彼女を叩きしていた。それは僕が塾へ向かう途中、川沿いの桜並木の下のことだった。私は両手を広げ、桜の花びらが舞い散る中でぐるぐると躍っていた。

何をしているのか。僕がそう問うと、私は満面の笑みでこう答えた。

「桜つて散るの早いね！ だから咲いてるうちに、楽しんでおくの！」

いつも通りの答えに僕は苦笑した。私はあまりに自由だ。彼女の中に彼女以外の人間や社会という視点はまず存在しないのだろう。彼女が純真に笑えるのも、この世の憂いといった事柄を知りうともしないからに違いない。

しかし彼女ももう中学三年生だ。言つても意味がないとは思うが、しかしクラスメイトといつ立場から僕は彼女に苦言を呈す。もう一年も経たずして高校入試が控えている。皆塾に通つて勉強しているのに、君はそれで大丈夫なのかと。

私は僕の心配するような表情に、されどきょとんと小首を傾げるだけだった。

「何で勉強しなくちゃいけないの？」

そんなの決まっている。自分の将来のためだ。

「勉強なんてしなくても生きていけるよ？」

それはただの勉強嫌いの屁理屈だ。僕は彼女にそう諭す。確かに勉強しなくても生きていけるが、今の社会でそれは無理なのだ。安定した生活をしたいのであれば、今のうちからきちんとすべきことをしなければ。嫌であろうが、それが自分たちの定められた道だ。仕方ないが従わなければいけない。

「へんなの」

しかし、私は表情一つ変えずそう答えた。

「何でみんなみんな、同じことしてるの？ 決められたレールの上を仕方ない仕方ないって言いながら、嫌そうな顔をしながら、走つしていくの？ 何でみんな楽しく生きようとしないの？ おとのの言

うことを信じて、自分のしあわせを決めつけて、我慢しながら生きていいくの？」

やはり私は私に何を言つても無駄だったのだ。僕はそう判断する。彼女は人間社会というものを何も分かつていらない。いつか自分が周囲から大きく逸脱していたと気付き、己の考え方を悔いる日が来るだろう。そう思い、僕はかぶりを振りながら別れの挨拶を告げる。

彼女に背を向け歩き出したそのとき、背後からの明朗な声が僕の鼓膜を揺らした。

「じんせー楽しんだもん勝ちっー！」

確かに今はそれでいいだろう。だが将来は。。。そう思つて、僕は密かにため息をつく。

そしてその僕との会話を最後に、私は彼女自身の人生に幕を引いた。

私は私を轢いたトラックの運転手によると、彼女は桜の花びらを追いかけてトラックの前に飛び出したのだと言つ。しかしそれでも、逃げようと思えば逃げることが出来るほどの間はあつた。しかし私は、己に迫るトラックを視認すると、恐怖に身が竦むでもなく、焦つて思考が回らなくなるのでもなく、その場で大きく万歳をして笑みを浮かべたのだと言つ。

「たのしかつた！！」

大声で、彼女の年齢に似つかわしくない屈託のない表情で、一片の悔いもないような清々しい聲音で。

それが彼女の最後の言葉だつたらしい。

私は私の葬式の後、僕は私は私が轢かれた川沿いの道へ立ち寄つた。警察が既に検分を済ませた後なのであろう、事故現場は僕が最後に私は私と会つたときとまるで変わらぬよつた状態であった。ただ、私は私が躍つていた桜の木の下に彼女を悼んだのであろう花束が幾つか置かれているだけだ。

頭上を仰ぐと、桜が満開に咲き誇っていた。風が吹く度に花弁を散らすその木の下で、僕は徐に両手を伸ばす。特に何かを考えた訳ではなかった。ただ無意識に、くるり、くるり。かつて私は私がそうしたように、円を描くように躍り始める。

私は私が死んだ。

何故彼女は死んだのだろうか。

逃げようと思えば逃げられたはず。なのに逃げなかつた彼女は、人生に見切りをつけていたのか。今年から始まる受験戦争に、その後に控える大学受験に、就職に、社会的な活動に、全てに見切りをつけて己から人生に幕を引いたのか。周囲を顧みず社会を顧みず将来を顧みず、楽しむだけ人生を楽しんで、謳歌するだけ人生を謳歌して、そしてこの桜のよつに潔く散つていつたと言つのか。あまりにも無責任な話である。

だがしかし、何故か僕は彼女の生を完全に否定できなかつた。

楽しむだけ楽しんで。人生を謳歌して。潔く死んで。彼女のような生き方がある反面、何故僕らは自制して社会の構成員を演じ続けているのだろうか。それに意味はあるのだろうか。本当に人間らしいのは、果たしてどちらなのか。社会は当然、僕らの生き方の方が正しいとするだろう。社会を作り、子孫を残し、社会を持続させていく。それが社会を作る人間のあるべき姿である。社会から逸脱し、完全なる個として生きた彼女は言わば異端だ。そう己を肯定する気持ちの反対側で、もう一人の己が囁く。ならば人間個人にとつて、社会とはどれ程に価値を持つものなのか。己を殺してまでも従属するほどの価値のあるものなのか？　あまりにも自己中心的な考えであるが、私はそう考えた末に社会を否定したのではないだろうか。社会だと個人だと価値だとか、そんな全ての概念を取り去つて、それでも彼女の生き方を否定できるかと問われれば、僕はそれに躊躇なく首を縦に振れる自信がない。

桜花と共に舞いながら思う。

僕は、私は私が羨ましかつたのかもしない。

だがしかし、彼女の生を真似ようとは思えない。彼女と僕の選んだ価値観は、全く違うものなのだから。

両手を下ろす。両足を地面につける。前を見据える。

そのまま僕は歩き出す。僕が選んだのはレールが敷かれている道だ。僕と私市私的人生は、ここで完全に分かたれている。

一風変わったクラスメイトの、たった十四年と数ヶ月の生を思い、僕は一度だけ背後を振り返った。

満開の桜が堂々と咲き誇り、そして散りゆく。そんな光景が、そこにはあつた。

私市私が、死んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0509z/>

私市私が死んだ

2011年12月1日22時50分発行